

WS-3 ワークショップ

危機言語の継承に向けたアクション・リサーチ

横山晶子（日本学術振興会／国立国語研究所）

1. 問題の所在

UNESCO が「危機言語地図」を発表し、危機言語に対する関心が高まる以前から、方言を次世代に伝える取り組みは各地でなされてきた（日本方言研究会 2017: 1-40 など）。しかし、研究者による言語復興に向けた取り組みは「アウトリーチ活動」として取り組まれることが多く、研究の中心課題として位置づけられることは少なかった。アウトリーチ活動自体には価値があるが、研究として取り組まれないことで、後進の研究者が検証し得る十分な記録が残らず、経験知の共有が十分に行われにくかったという側面がある。また、言語復興への取り組みを学問的に位置づける、理論的枠組みや方法論の検討も不十分である。

今後、より多くの地点で言語維持・復興を達成するためには、個別の地域で取り組む研究者たちが、失敗や課題も含めた包括的な事例の記録を行い、起こり得る事態を、後進の研究者が予測できるようにすることが望まれる。また、言語復興に活用できる理論的枠組みや方法論的枠組みの検討を進めることも必要である。本発表では、言語復興に取り組む研究者が活用出来るアプローチとして「アクション・リサーチ (AR)」を紹介し、その考えに基づく琉球諸島沖永良部島での取り組みを紹介する。

2. アクション・リサーチ論と研究者の役割

2.1. アクション・リサーチとは

アクション・リサーチという用語は、Lewin (1946) によって提唱されたのち、社会心理学、教育学、社会福祉、看護学など、様々な分野で用いられている。分野によって定義は様々であるが、矢守 (2010: 13) によると、以下の 2 点がミニマルな特徴として挙げられる。

- (1) 目的とする社会的状態の実現へ向けた変化を志向した広義の工学的・価値懐胎的な研究
- (2) 上記に言う目標状態を共有する研究対象者と研究者（双方を含めて当事者）による共同実践的な研究

(1) について、AR は、社会において「問題がある」と当事者（研究対象者・研究者など）が考える状態を、より良い状態へと変化させることを目指す。特定の状態を「問題がある」と感じ、別の状態を「より良い状態」と考える時点で、そこにはある種の価値判断が働いている。AR は、こうした価値懐胎性を認め、その偏りを自覚した上で遂行する研究と言える。

(2) について、AR は、実験者効果や評価懸念といった問題に代表されるように、研究者

と研究対象者の独立性は100%保証できないという前提に立つ。このため、研究者と研究対象者は平等に「当事者」として位置づけられ、それぞれが、具体的な目標を達成するために適した役割を担うことになる。

さらに「狭義の科学研究と異なり、普遍的な理論というよりも、特定の状況と場に効果的な解決策を目指す (Densin & Lincoln 1994)」という点も、ARの特性と言える。この方針は、実際の社会活動において、普遍的な解決策を特定の場や人びとに適用することは難しいという考えから生まれている。

言語復興研究は「言語維持」や「言語復興」という具体的な目標を持つ。また、その目標を達成するためには、地域の人が主体となり、地域に適したアプローチを取る必要がある。こうした共通性から、アクション・リサーチの概念が言語復興研究に有用であると考えられる。

2.2. 研究者の役割

ARにおいては、従来「研究対象者」とされて来た人々自身が、問題を分析し、解決する主体的な実践者として位置づけられる。このため、研究者は研究を行うエキスパートというよりも、人々が自ら問題を分析し、解決するのを支援する「促進者 (facilitator)」や「触媒 (catalyst)」としての役割を求められる (Stringer 2013: 20)。ARにおいて、研究者がサポート的な位置付けになるのは、倫理上の問題だけでなく、現実社会の中で物事を動かすためには、現場の力学を知っている人を主体とした方が、遥かに効率が良いからである。

3. 沖永良部島における取組み

3.1. 沖永良部語について

他の琉球諸方言と同様に、鹿児島県奄美諸島沖永良部島 (図1) の言語 (以下、Lewis 2013 に従い「沖永良部語」と呼ぶ) も消滅の危機に瀕している。



図1. 沖永良部島の位置

沖永良部島では、島内2地点で文法記述書が執筆され（ファン・デル・ルベ 2016、横山 2017）、それに伴う自然談話資料の収集や公開も進んでいる。また、国立国語研究所による共同調査の報告書（木部編 2016）や、方言集にも一定の蓄積がある（甲 2006、ニシエ 1968 等）。今後も、言語記述や言語ドキュメンテーションを続けていく必要があるが、一方で、沖永良部語の記述・記録に一定の蓄積が出来たいま、言語を次世代へ伝えていくために、言語復興に向けた具体的な行動を取る時期にも来ている。

3.2. 沖永良部島における取り組み

言語復興において研究者が果たせる役割は、地域の人たちが言語を継承していくための手助けをする「促進者」に他ならない。このため報告者は「地域の主体的な言語復興活動のきっかけを作ることを目標に、研究を展開している。また、本報告では取り上げないが、報告者は「言語復興の港（代表：山田真寛氏 <http://plrminato.wixsite.com/webminato>）」プロジェクトでの絵本製作や小学校での取り組みにも携わっている。

(1) 講演活動

公民館や郷土研究会等で講演し、(a) 島の言葉が危機言語であること、(b) 過去の事例より、危機言語の復興は不可能ではないこと、(c) 言語の復興のために出来る活動について話している。(a) は地域でも認識されているが、(b) や (c) は、地域の人たちがアクセスし辛い情報であるため、研究者が伝える意義がある。実際に、講座でハワイ語の事例を紹介したことで、学童保育で言語復興活動が生まれたこともある¹（Tokunaga-Yokoyama 2015）。

(2) 教材作成

教育に使える教材の開発に取り組んでいる。沖永良部語の研究は現在進行中であるため、後から修正や追加が必要になる可能性がある。また継承に向けた時間がない中で、出来た部分からでも公開を進める必要がある。このため、教材の開発には以下の手順を踏んでいる。

- (1) 教材をトピック（格助詞、挨拶など）毎に制作し、(2) 方言教室（後述）で試用する。
- (3) 教室で得たフィードバックを元に教材を修正し、(4) ホームページ（後述）を通じて公開する。現在は、報告者が主に教材を作成しているが、将来的には、地域の人が教材を作り、それらを自由に共有できる仕組みを作りたいと考えている。

(3) 方言（しまむに）教室

しまむにを定期的に学べる教室を運営している。1つは、国頭集落で小学生を対象に、月に1回開講している。もう1つは、移住者や若者を対象に、2・3か月に1回開講している。いずれも、やがて地域主体の活動に移行出来るよう、地域の組織を母体とし、報告者がいな

¹ 残念なことに、この学童保育は、財政上の理由や人手不足から 2016 年に閉鎖している。

い時には、地域の方に先生を依頼しながら運営している。

(4) ホームページ「しまむに宝箱」

より多くの人、特に言語継承のターゲットである若・中年層に沖永良部語の情報が届くよう、ホームページ「しまむに宝箱」<http://erabumuni.com>を通じて、(2) で述べた教材、しまむにの動画、語彙データベース（約 2000 語）を公開している。

4. まとめ

本報告では、言語復興活動に援用できる枠組みとして「アクション・リサーチ」を紹介し、その考え方に基づく、沖永良部島での取り組みを紹介する。報告者は言語復興を中心課題とし、直接的に関与しているが、言語復興における研究者の役割を、地域の言語復興を促す「促進剤」と捉えると、様々な関わり方が可能である。地域には地域固有の背景があり、効果的なアプローチを一般化することは難しい。しかし、今後、詳細な事例報告が増えることで、地域と協働する方法や教授法など、様々な側面での経験知が共有されることが望まれる。

引用文献

- 甲東哲 (2006) 『島のことば』 三笠出版社
- 木部暢子編 (2016) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究』 与論方言・沖永良部方言調査報告書』 国立国語研究所
- ニシエ, サラ・アン(1968). *Asikiyoramuni: Studies of a Ryukyu Dialect*. 東京大学人文社会系研究科修士論文. <http://innowayf.net/download.html#okinoerabu> から閲覧可能。
- 日本方言研究会 (2017) 『日本方言研究会第 104 回発表原稿集』
- ファン・デル・ルベ, ハイス (2016) 『琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究』 琉球大学博士論文。
- 矢守克也 (2010) 『アクションリサーチ: 実践する人間科学』 新曜社
- 横山 (徳永) 晶子 (2017) 『琉球沖永良部島国頭方言の文法』 一橋大学博士論文。
- Denzin, Norman K and Lincoln, Yvonna S.1994. *Handbook of qualitative research*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Tokunaga-Yokoyama, Akiko. 2015. The progressive efforts to revitalize language in Okinoerabu Island. International conference on Language Documentation and Conversation.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.) 2013. *Ethnologue: Languages of the World, 17th edition*. Dallars: SIL International.
- Lewin, Kurt. 1946. Action research and minority problems. *J Soc. Issues* 2(4): 34-46.
- Stringer, Ernest T. 2013. *Action research*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- ※この報告は以下の助成金に基づく研究成果です。特別研究員奨励費「危機言語の継承に向けた実践的研究ー琉球沖永良部語を事例にー」、スミセイ女性研究者奨励賞「危機言語の言語継承に向けた教材開発研究」